

[ 別紙 2 ]

## 論文審査の結果の要旨

申請者氏名 田邊 昇學

---

日本では昭和 30 年代以降、都市への人口集中が進み、市町村等の行政単位を超えた都市圏が急速に拡大する一方で、農村地域では過疎化が進行し、国土の均衡ある発展という観点からみて多くの都市計画・地域計画上の問題が生じた。こうした問題に対して実効性の高い都市計画・地域計画施策を策定するためには、都市圏形成の動向を予測・評価したうえで、適切な計画単位を設定することが不可欠である。本研究は、20 世紀後半期におけるわが国の広域的な都市圏形成の変遷を解明するとともに、都市および都市圏の発展・衰退の要因を立地条件、産業構造、歴史的条件等との関連から明らかにすることにより、戦後の都市計画・地域計画の問題点を考察し、望ましい計画単位と計画目標のあり方を検討することを目的とする。本論文は、研究の背景と目的をまとめた序章および以下の 4 章から構成される。

「全国都市圏・農村圏及びその構成市町村の体系的分類に基づく変遷比較（第 1 章）」では、昭和 35 年～平成 7 年の国勢調査等の統計資料を用いて、全国の都市圏・農村圏およびその構成市町村を規模および機能拠点性の観点から体系的に類型化したうえで、この間にみられた急速な都市化に伴う都市圏・農村圏の変遷を解析した。まず、人口集中地区（DID）人口 1 万人以上の市町村を都市と定義したうえで、DID 人口規模によって 5 グループに類型化した。つぎに、通勤・通学調査に基づき、都市圏、農村圏等を設定した。その結果、都市圏は 161 の中心都市を核とした 2,666 市町村、農村圏等は 99 の中心町村を核とした 354 町村で構成されており、市町村の 95%が広域圏を形成していることが明らかになった。一方、これらの広域圏に属さない孤立町村が 160 存在することが分かった。また、産業大分類別従業者調査に基づく各市町村の産業特性の推移を解析した結果、純農村の激減、工業の全国進出、三次産業の中心都市への集中といった実態が明らかになった。

「20 世紀後半期における全国都市圏・農村圏及び各構成市町村の変遷（第 2 章）」では、第 1 章で区分した都市圏・農村圏等の類型ごとに、人口、人口集中地区、就業人口、産業別人口、通学人口等に関する既往の統計資料から、人口動態に関する計量的解析を行い、大都市圏等への人口集中と過疎地域発生の実態を全国スケールで明らかにするとともに、都市・地方の急激な変遷に起因する都市・地域計画上の課題を考察した。

「20 世紀後半期における全国都市公園等整備の実績及び現状に関する評定と考察（第 3 章）」では、都市圏・農村圏等の類型ごとに、都市公園等整備に関する統計資料を用いて、昭和 35 年～平成 12 年における都市公園等整備の進展状況を解析し、目標水準に対する充足率から現況を評価した。その結果、DID 人口 4 万人未満の小都市圏ではおおむね 60%以上、同 100 万人未満の都市圏でも 40%以上の達成率であったが、同 100 万人以上の大都市圏では 20%程度の達成率にとどまっていることが分かった。以上から、都市公園の整備は

ほぼ全国的規模で推進されてきたものの、三大都市圏および一部の都市圏が今後さらに整備を進めるべき重点圏域として抽出された。

「中心都市，都市圏等の発展・衰退要因の解析及び総括的考察（第4章）」では，上記各章の解析により把握した都市圏・農村圏等の発展・衰退あるいは都市公園整備の格差について，その要因を明らかにするため，全国に分布する中心都市等 250 およびその都市圏・農村圏を対象に，昭和 25 年～平成 12 年の人口動態に基づいて成長，減少，激減タイプに区分したうえで，それぞれの立地，沿革，振興政策，各種計画制度，市街地・都市公園整備状況等を比較した。その結果，各都市固有の自然立地条件，複合化した沿革，地域産業と教育動向，既往の地域振興政策，都市計画等に基づく諸事業の影響と効果が，都市・農村の盛衰と格差をもたらす要因であることが明らかになった。以上の結果から，各圏域の抱える計画課題の解決には，都市圏等の広域生活圏を単位とする計画立案が必要であることを指摘した。

以上要するに，本研究は，広域的な都市圏形成プロセスと要因を全国スケールで解明し，望ましい都市・地域計画単位として広域生活圏の概念を提示したものであり，新全国総合開発をはじめとする 20 世紀後半の都市・地方計画の進展に大きく寄与した業績として高く評価できる。さらに，本研究の成果は，昨今進められている市町村合併の妥当性を，広域生活圏形成の観点から評価する際の指針となるなど，今後の都市・地域計画のあり方を検討する上での重要な示唆を与えるものとして高く評価できる。よって，審査委員一同は，博士（農学）の学位を与えるに十分値する論文であると判断した。